

優秀なる教師陣

かつて人材の淵叢^{えんそう}と称せられていた防長の凋落ぶりを深く憂いた在京の山口県出身者は、防長教育の復興を願い資金の収集や人選に奔走し、その行動はやがて明治17(1884)年の防長教育会の設立へと繋がった。

よって、校長をはじめとする山口高等中学校の教師陣の人選には、防長教育再興への強い思いが込められている。

こうちのぶとも

初代校長 河内信朝

県立山口中学校はしばらくの間、専任校長の不在が続いていた。在京の山口県出身者たちは熟議の末、東京で判事の職についていた河内信朝を推薦し、河内は明治16年8月、県立山口中学校長に任命された。

河内は萩に生まれ、萩、山口の両明倫館に学び、明治2年に上京。開成学校、大学南校に学んだ後、文部省などを経て、明治14年、判事に任じられ東京控訴裁判所に勤務していた。県立山口中学校の校長への就任は、この判事の職を捨て、教育会へ身を投じるものであった。

河内の着任は、ちょうど防長教育会の創立時期にあたっており、校務の傍らその事業にも深く関係し、教則の改正や、五中学制度の確立に尽力した。

学制改正により山口高等中学校が成立した後も、引き続き校長を務める。河内は防長二州に留まらず、広く天下の英才を教育して、これを中央の最高学府に送ること、またいずれ国を治め発展させるような人物を輩出するという希望と抱負を持っていた。その熱意と誠実な人柄のため、学生からの信頼も厚かったという。

明治26年の寄宿舎事件を機に、一時山口を去るが、山口の中等教育は河内を中心に発展したと言っても過言ではない。



山口高等中学校在職時の河内信朝

教頭・数学教師 隈本有尚

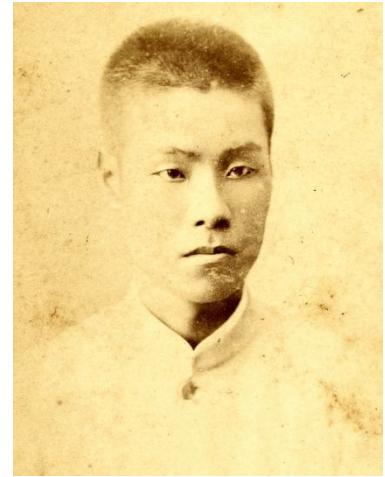
教師の多くは帝国大学の出身であった。当時は「防長俊才教育」が行われており、多くの授業が英語で行われた。学習専門の英語教科書はなく、原書が用いられたが、予備校4年間の語学力では到底ついていけず、予科を設けて補習をしているほどだった。

教頭を務めた隈本有尚は、富士山頂で日本初となる気象観測を行ったり、日本にはじめてマトリクス代数を紹介するなど極めて優秀な人物だった。

山口高等中学校赴任以前には、わずか25歳で福岡の名門・修猷館しゅうゆうかんの初代館長として迎えられている。東京大学予備門では、夏目漱石、正岡子規、秋山真之らに数学を教えていた。英語が巧みで、数学の授業も英語で行っており、英語が苦手であった正岡は隈本の数学の試験に落ち、予備門を卒業できなかったというエピソードもある。

また、隈本は正義感が強く、非常に厳格な人物であった。その厳格性からか自転車で街角を曲がるときも直角に曲がっていたとも伝えられている。授業も厳しく、当てた生徒に他の生徒が教えていると退室を命じた。生徒からは「教え方がまずい」と不満も出ており、彼の授業ぶりも寄宿舍事件の一因であったようだ。

ちなみに、隈本は夏目漱石の小説『坊っちゃん』に登場する一本気な先生「山嵐」のモデルとなった人物とも言われている。



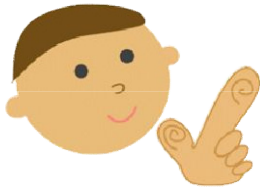
隈本有尚



山口高等中学校予科第1回卒業生と教師たち
(明治22年7月)

こぼれ話

あまりにも真面目過ぎた 隈本有尚の人生



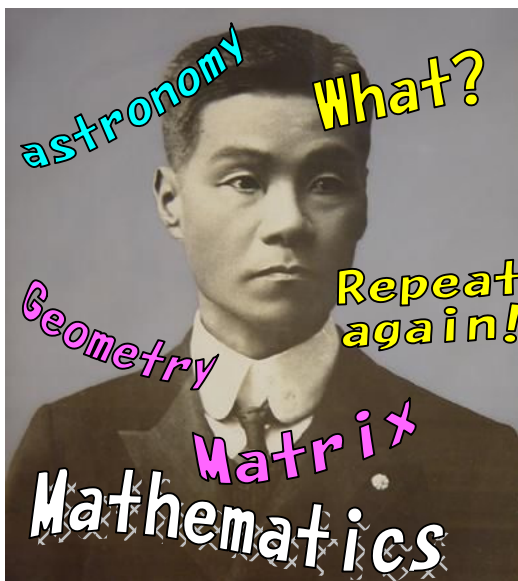
しつこいようだけど、硬骨漢ゆえの逸話があまりにも面白いので、隈本教頭に再度登場してもらいました。

<逸話その① 学生時代>

東京大学理学部の第一期生として入学し、星学(後の天文学)を専攻。物理・化学・数学に加えて英語までも堪能な、大変優秀な学生であったにもかかわらず、学士の称号をもらえなかった。なぜか？

それは、卒業式で「人物の真価^{あに}豈一枚の紙を以て定むるを得んや」と言って、卒業証書を理学部長菊池大麓(後の東大総長、文部大臣)の面前で破り捨ててしまったからだという。菊池の数学者としての才能に、かねてより疑問をもっていたことからくる日頃からの反目があったらしい。

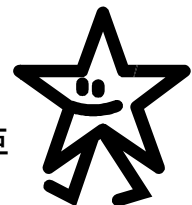
ちなみに、菊池の写真も残っている。記録によると菊池は明治26年に山口高等中学校に視察のため来校。この再会を二人は喜んだのだろうか。



<逸話その② 晩年>

文部省視学官、長崎高等商業学校長などを経て、晩年は天文学が昂じたのか、占星術にハマっている。西洋占星術を日本に初めて紹介した。

山一証券の創業者小池国三は、隈本の占星術による景気予測によって巨万の利益を得たと言われている。



恩師たち

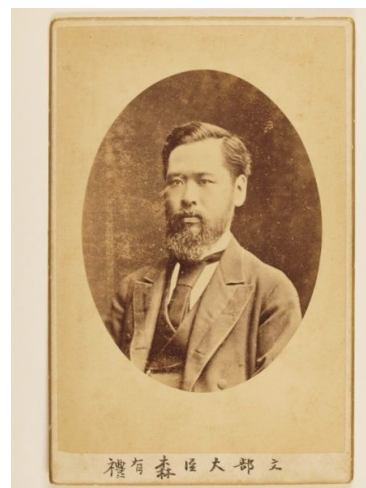
■ 設立・運営に貢献



毛利元徳
防長教育会長
〔防長先賢肖像絵葉書〕より



原保太郎
山口県知事



森有礼
文部大臣



井上馨
防長教育会顧問
（当時は外務大臣）



品川弥二郎
防長教育会幹事
〔防長先賢肖像絵葉書〕より



エミール・ハウスクネヒト
帝国大学雇教育学教師

■ 主な教官



隈本有尚：教頭
数学・物理・天文
(後に文部省視学官)



河内信朝：初代校長
(後の官立山口高等学校第3代校長)



堅田少輔：英語
(後に衆議院議員)



井原百介：幹事、博物学
(後に大阪高等農学校長)



岡田良平：第2代校長
(後に文部大臣)



加藤彰廉：
英語・歴史・哲学・理財学
(後に松山高等商業学校長)



谷本富：倫理・歴史・哲学
(後に京都帝国大学教授)



實吉益美：数学・物理
(後に学習院教授)



湯原元一：独逸語・歴史・博物
(後に東京高等学校長)



土井助三郎:
物理・化学・地質学・鉱物学
(後に名古屋高等工業学校長)



頓野百太郎:
地理・物理・化学・測量
(後に中央気象台技師、
頓野私立山口測候所開設)



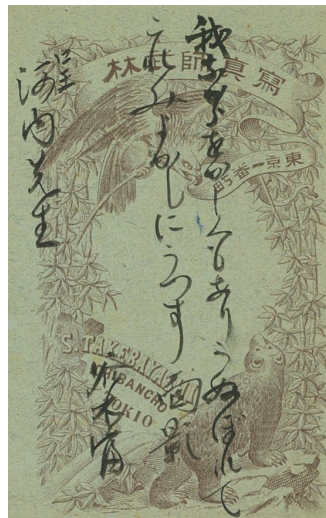
ロメイン・ベッキ:英語
(雇外国人教師、
米人宣教師で博覧強記の学者)

肖像写真について

ここに紹介したセピア色の肖像は、名刺判写真である。河内信朝校長の長男才三氏から山口高商時代の昭和15年に寄贈されたものが、今日に至るまで残っている。

肖像写真をキャビネ判あるいは名刺判にして配ることが当時の流行だったのだろうか、これらの写真も校長への新任挨拶の際に名刺代わりに使用されたようである。

帝大文科特約生だった谷本富のものは、裏面に東京の写真師「武林」の



谷本富の名刺判写真裏面



堀三友の名刺判写真裏面

デザインが見える。また、同じく帝大法科出身で山口地方裁判所判事だった堀三友のものは、山口八坂神社内にあった松原写真館で作成したものと思われる。



旧松原写真館(河村写真館)

明治20年前後に旧士族の松原繁が写真館として建築したと考えられ、その後河村写真館に変わった。

建築当時から今日まで、所有者を変えながらもおよそ120年にわたり写真館として使用され続けたことは、国内においても他に例が無く、建築当時の原形をよく留めており、県の文化財に指定されている。